



Case4 農業の未来を担う 酪農家を志す高校生

那須拓陽高校 牛部

このまちの酪農の未来を託された彼女たちは、希望に満ちあふれていた。

牛の可愛さ、魅力をもっと知ってほしい

酪農でも後継者不足が問題視されるなか、県立那須拓陽高校では次世代の担い手育成が行われています。同校は1945年に県立那須農学校として開校。本市の生乳生産本州一を人材育成において大きく支えています。

そんな那須拓陽高校には、全国的にも珍しい「牛部」という部活があるのです。農業以外の学科の生徒にも酪農にふれてもらいたいと10年前に乳牛和牛研究

会として創設。4年前に牛部として格上げされました。現在は19人の部員が在籍していて、活動は月曜以外の平日の放課後と土日の午前中を基本に行っています。同校が所有する乃木農場では乳牛・和牛合わせて60頭以上を飼育。生徒たちの活動は、まさに酪農家そのもので、エサをあげたり、搾乳をしたり、牛舎を清掃したりと多岐にわたります。牛部では毎日が真剣勝負。少しでも気を抜いて世話が疎かになれば牛がケガをしたり、病気にかかったりしてしまいます。また、命懸けで行われる出産では、死に遭遇することもあるそう。生徒たちは、牛の「生と死」に間近で触れながら命の大切さを学んでいるのです。

牛部の部員に、将来の夢を聞きました

最初は牛が怖いと思っていたけど、今では可愛くて仕方ないです。毎日世話をしていると、顔を覚えて懐いてくれるのが嬉しいです。牛の体調管理や繁殖など専門的に学びたいので、卒業後は酪農関係の大学に進学予定です。



手塚 奈津美さん(3年)



安田 未来さん(3年)

力仕事や排泄物の掃除など大変なこともありますが、楽しいことのほうが多いです。なにかに落ち込んでも元気をくれるのは牛たちで、また頑張ろうと思えます。将来も牛と触れ合える仕事がしたいと思っています。



大きな牛で800キロを超える。共進会で姿勢よく歩けるよう歩行訓練を行う。



生徒たちが一頭一頭搾乳器をつけていく。



数種類の飼料を混ぜて、牛が食べやすいように口元まで運んで与える。

Case3 両親の思いを引き継いで 農業を始めた若き後継者

菊池 太輔 さん

両親と共に菊池いちご園を営む。全く別の業種から農業の世界へ飛び込んだ。



質の高いイチゴを作り、
広く知ってもらいたい

ガラリと変わった農業の印象

東日本大震災を機に、地元に戻って農業を継ぐことを決意し、2012年の5月から就農した菊池さん。「両親がとちおとめを育てていましたが、せっかくな後継者なら、新しいことにも挑戦したい」と思い、夏秋どりイチゴなつおとめ「の栽培を始めました」と話します。

「就農する前は、農業は少し古臭いイメージで、知識や技術をあまり必要としない仕事だと思っていました」そう語る菊池さんは、農業をはじめ、そのイメージが大きく変わったそう。

一口に高い品質と言っても、味・色・ツヤ・形など基準が多岐にわたり、これらが総合的に評価されて市場での価値が決まります。就農後、菊池さんは市場で高い評価を得るためには、絶え間なく研究を重ね、科学的根拠に基づいた栽培が必要だと知り、驚いたとのこと。

「農業は自分のやり方次第で可能性はまだたくさんあると思います」と農業に対する思いが変化した当時を振り返ります。現在、菊池さんは水や肥料の頻度やハウス内の温度を徹底的に管理し、美味いイチゴを作るべく、日々研

温度管理されたハウスでは真っ赤ななつおとめが実る。



究をしているそうです。農業の先輩である両親にアドバイスをもらいながら、状況に応じて作業を自分で決め、進めていけることに農業のやりがいを感じるそうです。

農業の広がる可能性

「これからの農業は作物を作るだけでなく、自分の作ったものを広く知ってもらい、買ってもらうための努力が必要だと考えています」と語る菊池さんの眼差しには強い気持ちが表れていました。

「とちおとめ・なつおとめは県内では知られた品種でも、全国の市場で見ると各地域でさまざまな品種が研究開発され、競争も厳しくなってきました」と外部への発信の重要性を訴えます。

なつおとめは洋菓子店など業務用の販売がメイン。しかし、東京で開催される展示会にも出展し、全国に向けたPRを積極的に行っているそうです。

新たな独立・自営就農者を応援しています ～農業次世代人材投資事業(経営開始型)～

せっかく農業を始めても、経営が軌道に乗るまでは資金面での苦勞がつきもの。本市では、国の補助制度を活用し45歳未満の新たな独立・自営就農者に対して、就農直後(5年以内)の経営資金の一部を援助しています。

この農業次世代人材投資事業で援助を受けるためには、親元に就農して後を継ぐだけでは対象になりません。新た

な作物を取り入れるなど、何か新しいことにチャレンジすることが必要です。

しかし、「親の後を継ぐため」に就農する人も多いのが事実。農家の跡継ぎたちに対する支援策も早急に考えていく必要があります。

▶問い合わせ 農務畜産課 ☎0287(62)7147